



審判について考える

いよいよサッカーのワールドカップが始まりました。残念ながら日本代表はコートジボワールに敗れ、黒星発進となりましたが十分な準備を積んできたのですから、あとは運を掴むだけです。頑張れニッポン！！

さて、今回のワールドカップでは日本人で開幕戦の主審を務めた西村裕一さんも話題となっています。ブラジル対クロアチア戦では、選手により近く、よく見える角度からのジャッジを心がけて全力で走る姿が印象的でした。何よりもブラジルのエースといえども毅然とイエローカードを出し、試合を決定づけるPKとなったクロアチアの選手の反則（ペナルティエリア内で相手の選手を倒した事）も自信をもってジャッジするなど、自分の目とルールへの確固たる自信を感じました。

私も剣道の審判を取りますが、試合の流れを見て、反則で決着がついてしまうのはどうかななどと考えると反則は取りにくいものです。だから、一瞬一瞬の打突や行為を明確に判断することに集中しなければならないのが審判です。また、ジャッジによってその競技や試合を、より望ましい形に導くのも審判の役割です。

結局PKでの1点が決勝点となってブラジルが勝ったのですが、試合後、その反則についてブラジルの選手がわざと倒れたのではないかという抗議の声があがりました。試合を決めた1

点に関わる反則でしたからそんな意見が出ることも分かります。サッカーには「シミュレーション」という反則があります。相手に倒されるふりなど反則や不正行為を受けたように審判を欺く行為を反則とするものです。反則に挙げられるのですから、審判を欺く行為が多いのかも知れません。今回の反則が「倒したのか」「倒されたふり」なのかは分かりませんが、スポーツマンシップだとかフェアプレイといった部分での論議ではないことは残念です。

何のためのスポーツなのか、本当にその競技を愛するのであればルールの網をくぐったり、灰色の部分で勝負したりすることは恥ずべき行為であるように思います。スポーツを通して、こどもたちに学んでほしいことはフェアプレイの精神です。

1990年にFIFAフェアプレイ賞を受賞したゲーリー・リネカーというイングランドの元代表選手は20年のプロ生活で一度もレッドやイエローのカードを受けたことがありませんでした。彼はサッカーを本当に愛する人だと思います。研鑽を怠らず、誰よりも全力でピッチを走り、毅然とプレイを裁く西村さんもまたサッカーを愛する人だと思います。審判とは難しいものです。わたしたちも「よいことはよい、ダメな事はダメ」とこどもたちをよりよい方向へ導く事のできる審判でありたいと思います。

【読書にみんな頑張っています】

No, 40に引き続き図書館利用について9日～13日の集計ができました。2の3の457冊を最高に各クラスがほぼ目標を達成しました。頑張っています。

羽合小学校 寺谷英則